

ESDモデルプログラムづくりの流れとプログラムシートの読み方（2018版に寄せて）

ファシリテーター 石井雅章（神田外語大学）

このガイドブックに掲載されているESDモデルプログラムの作成にあたって、千葉県内で日頃から環境活動や環境教育に取り組んでいる皆さんが集まり、活発な議論と意見交換がおこなわれました。その過程には、ESDとSDGsを考える上でとても重要な気づきが数多く含まれていたと感じています。

私は全6回のうち第2回を除く5回、ファシリテーターとしてその場に参加させていただきました。ここでは、ESDモデルプログラムづくりの流れと、そこで展開された議論を簡単に振り返りながら、どのようにして今回のプログラムシートが出来上がったのかを紹介し、実際のプログラムシートの読み方について説明致します。

【ESDモデルプログラムづくりの流れ】

ESDプログラムをつくる意義とは？

今回のESDモデルプログラムづくりに参加してくださったメンバーは、いずれも従来から地域での環境活動や環境教育を実践してきました。各自の環境活動と環境教育プログラムは、これまでの実践と試行錯誤を経ていきますので、いずれも完成度が高いものばかりでした。

そこで、まず私たちが取り組んだのは、地球温暖化・水環境・資源循環・生物多様性の4グループごとに各自のプログラムを持ち寄り、それらを参考にしながら各テーマのモデルプログラムを作成していただくことでした。

あるグループは、各自が持ち寄ったプログラムの比較対照表をつくり、各プログラムに共通する部分のなかにESDの要素を探ろうとしました。別のグループは、担当分野のESDプログラムをつくる上で欠かせないと思われるキーワードを出し合い、各自のこれまでの実践とは別のまったく新しいプログラムを作ろうとしました。

しかし、この作業をつうじて、参加者のなかにモヤモヤが生まれてきました。それは「なにを入れればESDのプログラムになるの？」「そもそもESDプログラムをつくる意義はなに？」といった疑問でした。ESDの考え方をあたりまえの前提にするのではなく、自分たちのアタマで考えながら試行錯誤することはとても大事な過程だと言えます。とはいえ、アタマで考えるだけではどうしても行き詰まってしまいがちですので、ひとまず次のステップに進むことにしてみました。

ESDの要素ってなに？

次のステップとして、各団体・個人がこれまでに取り組んできた環境活動・環境教育のプログラムにESDの視点を取り入れて、ESDモデルプログラムを作成することにしました。ESDの視点を取り入れるといってもそのままでは難しいので、ここでは、環境省『ESD環境教育モデルプログラムガイドブック』のフォーマットを参考にしました。このガイドブックでは、国立教育政策研究所教育課程研究センターが『ESDの学習指導課程を構想し展開するために必要な枠組み』という冊子で提示した「持続可能な社会の構成概念（案）」と「ESDの視点に立った学習指導で重視する7つの能力・態度（案）」を取り入れて、各プログラムをつうじて考える「持続可能な社会に必要な概念」と「身につける能力・態度」がアイコンとして示されています。そこで、私たちもこのフォーマットに準じて、各自のプログラムにESDの視点を取り入れ、アイコンを用いて整理することを試みました。

しかし、この作業をしてみるとまたモヤモヤが出てきました。それは「既存のプログラムにESDの要素を当てはめているだけじゃないの？」「そもそも、ESDの要素を入れればESDプログラムになるの？」という疑問です。

プログラムづくりをつうじた気づき

参加者との意見交換を進めるなかで気がついたことがあります。それは、「持続可能な社会を構成する6つの構成概念」と「ESDの視点に立った学習指導で重視する7つの能力・態度」を、プログラム全体が目指す学習の到達目標に対してではなく、プログラムの部分に当てはめてしまうことの危うさでした。例えば、プログラムの中でグループワークに取り組んでいるから、プログラムのこの部分では「協働性」を身につけられます、というように安易に当てはめてしまうのは問題があるということです。

また、もう一つ重要なことに気づきました。それは、上記の「6つの構成概念」と「7つの能力・態度」が、それ自体としては「ESDの視点」を示したものではないということです。「6つの構成概念」は持続可能な社会（SD）を構成する要素として示されたものに過ぎません。一方、「7つの能力・態度」は、ESDの視点に立った学習指導において重視するものとして提示されているものです。これらの概念・要素を各自のプログラムに結びつけたからといって、私たちが本来目指してきたESDの視点を取り入れたモデルプログラムになるわけではない、ということなのです。

そこで、今回のガイドブックでは、6つの構成概念と7つの能力・態度をアイコンとして表示することを避けることにしました。もし、各プログラムの内容が上記の構成概念や能力・態度と関連性があるという場合には、それぞれの欄を設けてその中に記載することにしました。

一方で、各プログラムが目指す「目標」については明確に記述することを心がけました。プログラムをつうじて、学習者がなにをできるようにするのか、という点を意識してプログラムを作成しました。とくに、目標を記述するときには「学習者が・・・」というように、学習者を主語にすることを心がけました。じつは、この考え方はESDに限った話ではなく、いま教育現場で求められている「教育者中心」から「学習者中心」への視点の変化と密接に関連しています。

さらに、各団体や参加者が、今回のESDモデルプログラムに込めた「想い」を記載してもらいました。持続可能な社会を担う人々を育てるために、各プログラムがどのような点を意識したのか、どのような工夫をしたのか、それらを言葉にすることが「ESDの視点」を取り入れたことになると思ったからです。

学校と地域をつなげる

さらにまた、別の気づきもありました。それは先述の『ESD環境教育モデルプログラムガイドブック』は、基本的に学校教育を想定した内容になっていることです。それに対し、今回のESDモデルプログラムづくりに関わっているのは、日頃から社会教育や市民活動として環境活動・環境教育に取り組んでいる方々です。参加者の気づきとは、モデルプログラムづくりをつうじて、学校教育・社会教育・市民活動をどのようにしてつなげていき、持続可能な社会（SD）を担う人々をどのように育てていくのか、ということでした。そこで、モデルプログラムのフォーマットのなかに「学校・地域等との連携上の考慮」という項目を設定し、各プログラムを実践するにあたって必要な連携上の考慮や工夫を記述することにしました。

『ガイドブック』を公開するにあたって

一方で、今回のモデルプログラムづくりのなかで議論はされたけれど、自分たちのなかでまだうまく消化できず、反映されなかったものもあります。例えば、1回の学習機会ですべて完結できるプログラムと年間を通して実施するプログラムを同じフォーマットで記載してよいのか、ガイドブックの利用対象者を、ここで紹介されているモデルプログラムをそのまま実施したい読者と、ここでのモデルプログラムを参考にして自分たちのESDプログラムを作成したい読者のどちらに設定するのか、などが挙げられます。

ESDモデルプログラムの『ガイドブック』として公開することで、ここで紹介されているプログラムがあたかも完成されたものかのように、一人歩きして捉えられてしまう可能性があります。参加者の議論においても、『ガイドブック』の利用対象者を明確にしてから公開した方がよいのではないかという意見も出ました。しかし、最終的には「今回のモデルプログラムは完成形ではなく、常に更新されていくべきもの」であり、モデルプログラムを参考に活用される方々と一緒に更新していくべきものと考え、このようなかたちでまとめることになりました。

ここまで読み進めていただいた皆さんにはお分かりのとおり、ESDプログラムは与えられるものではなく、目の前のいる学習者と持続可能な社会づくりを結びつけるために、自分たちで考え、実践しながら、更新していくものと言えます。このことを頭の片隅にイメージしながら、以下でご紹介するそれぞれのESDモデルプログラムをご覧ください。幸いです。

ESDモデルプログラムづくりの流れとプログラムシートの読み方（2019版に寄せて）

ファシリテーター 石井雅章（神田外語大学）

2018年度に引き続きESDモデルプログラムの作成のファシリテーターとして、新たなメンバーによるモデルプログラムづくりのお手伝いをさせていただきました。今回も多彩なバックグラウンドを持ち、日頃から地域で様々な活動をされている方々による魅力的なプログラムが揃いました。

プログラム作成の大まかな考え方は昨年度から引き継がれていますが、プログラムづくりのプロセスには若干違いがありましたので、その辺りに触れながら解説をしたいと思います。

【2019年度の特徴】

2019年度のESDモデルプログラムづくりでは、2018年度と比較して以下の3点が特徴として挙げられます。

エリアを分けて実施

1点目は、千葉県を便宜的に南北に分けて、北部エリアで活動する方々を対象に事業を実施したことです。千葉県はそれでも広いので、メンバーの活動地域をふまえた上で成田会場と船橋会場（実際には千葉）に分散して、プログラムづくりのワークショップをおこないました。

前年度は千葉県全体を対象としてメンバーが集まっていたので、日頃の活動をおこなうフィールドがかなり多様でしたが、今回はエリアを多少なりとも分けたこともあり、比較的似たようなフィールドや地域特性を持つメンバーが集まった印象があります。

その結果、お互いが持ち寄ったプログラムに対するコメントや相互のディスカッションにおいて、その活動やフィールドの特性を比較的理解をしてやりとりができたのではないかと感じています。また、地理的な近さがあるため、ESDプログラムの今後の展開に向けて、従来にはなかったコラボレーションが生まれる可能性もあり、その点ではエリアを分けて実施した効果が出たのではないかと思います。

少ない回数でのプログラムづくり

2019年度のプログラムづくりワークショップは、二つのエリアに分けたこともあり、各エリア3回ずつの開催となりました。メンバーが直接顔を合わせて発表や意見交換をする機会が限られていたので、ワークショップの時間内ですることにはだいぶ制約があり、各自の「宿題」としておこなう作業が多かったため、メンバーの皆さんは大変だったかと思えます。

ただ、エリアを分散したことで1回あたりの参加者の数が多すぎず、これまでのお互いの活動や持ち寄ったプログラム案を比較的しっかりと、かつ複数回聴くことが出来たのではないかと思います。また、事務局の柔軟な運営により、メンバーの都合によっては成田地区と船橋（千葉）地区のワークショップを入れ替えて参加することができるように工夫をいたため、普段から忙しいメンバーの集まりにもかかわらず、毎回のワークショップへの参加度が高く、回数の制約を乗り越えて充実したプログラムが出来上がったのではないかと感じています。

「お手本」の存在

昨年度との大きな違いは、「お手本」となるプログラムがすでにあったということです。昨年度はまったく初めての状態からの取り組みでしたので、「ESDプログラムをつくる意義」や「ESDの要素」など、プログラムづくりの前提となる概念や考え方を議論し、共有することにかかなりの時間を費やしました。それ自体は大変価値のあるプロセスでしたが、今年度については昨年度のメンバーが苦労してまとめて、かたちになったESDプログラムが手元にあるため、それを参考にしながら自分たちのプログラムを作成することができたのではないかと思います。

また、プログラムのみならず、昨年度のメンバーが「サポーター」として毎回のワークショップに参加し、適切なコメントやアドバイスを出していただいたこともありがたかったです。経験者が未経験者と一緒に考え、学び合うスタイルそのものが、ESDのプログラムにおいて重要だとあらためて感じました。

【ESDモデルプログラムの構成】

さて、このような特徴を通じて出来上がったモデルプログラムですが、基本的には昨年度と同じシートにまとめるかたちで提供されています。このシートは、本ガイドブックを手にしてくださった皆さまが各地でESDプログラムを実施する際に参考となる情報をまとめたものですが、プログラムの作成にあたっては、大まかに分けて3つのステップを踏んでいます。これらのステップを共有しておくことは、各プログラムの意図や工夫を理解する手助けになるかと思いますので、以下でお伝えしておきます。

ステップ1：想いと目標

プログラムづくりの最初のステップは、なぜこのプログラムをつくろうと思ったのか、提供者の想いを伝えることです。基本的に各モデルプログラムは、それぞれの日頃の活動をベースにしていますが、それらの活動には「こうありたい」「こうしていきたい」という何かしらの「想い」が込められているはずです。「想い」は活動、プログラムの価値の源泉といえます。但し、提供者の「想い」は当事者が考えているほど相手に伝わっていない場合があります。そこで、まずはそれぞれのプログラムに込めた「想い」を言語化してもらう作業から始めました。

もう一つ重要なのは「目標」です。「目標」には様々な水準があるのですが、ESDモデルプログラムは、持続可能な社会を実現する担い手を育てるための学習プログラムです。そこで、学習者の視点から目標を表現してもらうようにしました。具体的には、「学習者が〇〇をできるようになる」というように学習者を主語にした表現にすることです。団体や学校、地域社会にとっての目標を持つプログラムもありますが、その場合でもまずは学習者を中心にして目標を示すことを心掛けました。

ステップ2：プログラムの内容

想いと目標が明確になったら、それを実現するために必要なプログラムの内容を整理することです。従来から実践しているプログラムをベースにする場合、これまでやってきた方法や時間配分があるため、最初のうちはどうしてもそれにとらわれがちになります。しかし、ESDプログラムにとってもっとも大切なことは、学習者（参加者）に対して設定した目標に適したより良い学習機会を提供することです。学習者中心の視点を導入することで、従来のプログラムを見直し、時間配分を変えたり、順番を入れ替えたり、新たな話題提供を加えたり、といった様々な工夫が見えてきます。また、「想い」を実現し、「目標」を達成するために、学校や地域との連携を強化したり、他団体とのコラボレーションの可能性が出てきたりすることもあります。

ステップ3：ESD、SDGsとの関係

最後に、作成したプログラムがESD及びSDGsとどのように関係しているのかを示してもらいました。ESDについては昨年度と同様に、環境省『ESD環境教育モデルプログラムガイドブック』で提示されている「持続可能な社会づくりの構成概念」（6つ）と「学習者に習得してもらいたい能力・態度」（7つ）を参考にして記述することにしました。また、SDGsについては、プログラムと関連する17のゴールまたは169のターゲットを記載してあります。但し、これらの要素やゴール等への当てはめ自体にはほとんど意味はありません。繰り返しになりますが、もっとも大切なのはプログラムの「想い」と目指している「目標」です。各々のプログラムに込められた意図が、ESDやSDGsの観点から見たときにどのようなつながりがあるのか、それを理解するためのヒントとして位置づけてもらえればと思います。

さて、昨年度のプログラムも含めて、本ガイドブックでご紹介しているESDモデルプログラムは、あくまでも「モデル」です。皆さんがそれぞれの地域・フィールド等で実践される際には、これらの「モデル」を参考にして、それぞれの地域特性や使える資源（人的・物的・関係的なものを合わせて）を考慮して、自由にアレンジしていただければと思います。その際には、上で示した3つのステップを意識して考えると、学習者にとって意義のある効果的なプログラムになるはずです。

2019年11月にドイツ・ベルリンにて、ESDやSDGsの学びを実践している学校「ESBZ」を視察してきました。この学校は、生徒・教員・保護者がともにつくる学校として注目されているのですが、インタビューでの「学校は共同体であるべきです。なぜなら、学びの場なのですから」という言葉が印象的でした。本ガイドブックで紹介されたESDモデルプログラムでも同じことが言えるかと思います。ここで紹介した多様なプログラムを通じて、子どもだけでなく、大人も含めてともに学び合える場が広がり、持続可能な社会を実現するための担い手が増え、つながっていくことを期待しています。

【プログラムシートの読み方】

各ESDモデルプログラムは、共通のプログラムシートの書式で記載されています。ここでは、プログラムシートの各項目になが書かれているのかについて説明します。

対象	モデルプログラムが主な対象にする学校種や学年が記載されています。学校の単元や、これまでの実践をふまえて対象を設定してありますが、ここに記載されている対象以外に対して実施ができないというわけではありません。学校のカリキュラムや地域の状況に合わせて対象を変えることができます。
人数	モデルプログラムを実施するのに適切な人数が記載されています。人数についてはあくまでも参考であり、授業上の制約や地域の環境によって柔軟に変更することができます。ただし、プログラムによっては、グループ学習の組み方やフィールドでの作業体験などの都合により、人数を変更することが難しいものもあります。各プログラムの流れをよく理解して、人数の変更が可能かどうか考慮する必要があります。
教科／分野	モデルプログラムを実施するのに適した教科や分野が記載されています。学校の教科(単元)のなかで実施したい場合の参考にしてください。プログラムによっては、複数教科を組み合わせる実施することができるものもあります。また、必ずしも記載されている教科や分野にこだわらずに実施できるプログラムもあります。
授業時間数	モデルプログラムを実施するのに必要な時間数が記載されています。プログラムによって1回で完結するものもあれば、年間を通して実施するプログラムもあります。時間数についてもあくまでも参考ですので、各プログラムの目標を意識しつつ、学校や地域の条件に合わせて適宜調整してください。
場所	モデルプログラムを実施する場所が記載されています。一般的な教室で実施するプログラムもあれば、実験室や校庭あるいは地域の川や里山に足を運んで実施するものがあります。プログラムの目標を適切に達成するために、実施場所や環境の設定はとても大切です。各プログラムの良さを引き出すのに適した場所を見つけてみてください。
ESDプログラムへの想い	モデルプログラムを作成した団体・人々の立場から、今回のESDを意識したプログラムづくりにあたって大切にしたこと、重視した視点、意識した考え方などが記載されています。プログラム作成側の想いとプログラム実施側の想いが重なり合うことで、学習者の学びがより充実したものになると考えています。
目標	モデルプログラムをつうじて、学習者がなにをできるようにすることを目指しているのかについて記載しています。できるだけ「学習者」を主語にして表現するように心がけましたので、プログラムの提供者側の視点ではなく、プログラムをつうじて学ぶ側の視点から、それぞれのプログラムが目指していることを理解してもらえればと思います。
特徴	モデルプログラムの特徴が記載されています。従来のプログラムや同じ分野の類似したプログラムとの違い、プログラムを構築する上で工夫した点、プログラム実施に関連する地域の特性などが記載されていますので、各プログラムを選択する際の根拠や理由として参考にしてください。
持続可能な社会づくりの構成概念	環境省『ESD環境教育モデルプログラムガイドブック』で提示されている概念です。持続可能な社会(Sustainable Development:SD)を実現するための構成概念として、多様性・相互性・有限性・責任性・連携性・公平性の6つが示されています。各モデルプログラムと関連性のある概念がある場合に、プログラムと構成概念のつながりについて記載されています。
重視する能力・態度	モデルプログラムをつうじて学習者に修得してもらいたい能力・態度について記載されています。各プログラムでの学びをつうじて、学習者は多様な能力・態度を身につけることができると考えられますが、ここでは、環境省『ESD環境教育モデルプログラムガイドブック』で提示されている①批判的に考える力、②未来像を予測して計画を立てる力、③多面的、総合的に考える力、④コミュニケーションを行う力、⑤進んで参加する態度、⑥つながりを尊重する態度、⑦他者と協力する態度という7つの能力・態度との関連性が記載されています。

<p>プログラムの流れ</p>	<p>モデルプログラムを実施する際の手順が記載されています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「時間」欄には、プログラム内でおこなう各内容に掛かる時間が記載されています。1回で完結するタイプのプログラムでは分単位で記載されている場合がありますし、年間をとおして実施するプログラムの場合は、1回目、2回目といった回数に記載されている場合があります。 ・「ねらい」欄には、プログラム内で実施する各内容をおこなう理由がそれぞれ記載されています。ここでの「ねらい」とは、ESDモデルプログラムが全体として目指す「目標」のことではありません。例えば、アイスブレイクとしてグループメンバーで自己紹介をする場合の「ねらい」とは、学習者同士が打ち解けること、になります。また、プログラムの最後に振り返りシートへの記述をおこなう場合の「ねらい」とは、今回のプログラムでの各学習者の気づきを言語化すること、になります。モデルプログラム全体が目指すべきものが「目標」で、プログラム内で実施する各内容が意図しているものが「ねらい」ということになります。 ・「方法・場所」の欄には、プログラム内での各内容の実施方法や実施場所が記載されています。学校や地域の状況に合わせて、方法や場所を変更することは可能ですが、各内容の「ねらい」をふまえて、変更する方法や場所を選択する必要があります。 ・「内容」の欄には、文字通りプログラムのなかで実施する各内容が記載されています。時間的な制約などによって順番を入れ替えたり、スキップしたりすることがあるかもしれません。その場合は、モデルプログラムの「目標」をきちんと理解して、内容が変更されても目指すべき目標が達成できるのかどうか、学習者に期待される学びが実現できるのかどうか、考慮する必要があります。
<p>SDGsとの関連性</p>	<p>モデルプログラムがSDGsの目標（17のゴール・169のターゲット）と明確なつながりがある場合、関連するゴールもしくはターゲットが記載されています。</p> <p>ESDとは「持続可能な世界（SD）」を実現する人々を育てるための学びの機会です。SDGsは「持続可能な世界（SD）」を実現するために、2030年までに達成すべき具体的な目標です。ESDもSDGsも「持続可能な世界（SD）」を実現するという共通の目標を掲げていますので、モデルプログラムをSDGsとのつながりという観点から理解することも大切な視点と言えます。</p>
<p>学校・地域等との連携上の考慮</p>	<p>学校や地域と連携してモデルプログラムを実施する上で、考慮すべきことが記載されています。学校や地域のおかれている状況、活用可能な資源などは多様です。ある学校（地域）で成功したプログラムをそのまま他の学校（地域）に適用できるとは限りません。学校や地域それぞれの立場、状況を理解した上でプログラムを実施することが求められます。</p>
<p>その他補足事項</p>	<p>モデルプログラムを実施する上で考慮すべき事項、あらかじめ準備すべき事柄などについて記載されています。</p>

【ESD モデルプログラムフォーマット】

プログラム名□

対 象：□□
 人 数：□
 教科／分野：□□
 授業時間数：□□
 場 所：□□

ESD プログラムへの想い			
目標			
特徴			
持続可能な社会づくりの構成概念	<input type="checkbox"/>		
重視する能力・態度			
プログラムの流れ			
時間	ねらい	方法場所	内容
SDGs との関連性			
学校・地域等との連携上の考慮			
対象を発展させる可能性			
その他補足事項			

プログラム作成者名（団体名）：□